



古市元喜（大井高）

「キャプテンの気持ちでいますね」

これが古市元喜の指導者としてのスタンスなのだそうだ。

県立大井高等学校に赴任して3年目。初年度は北村央春監督（現与野高校）の下でコーチとなり、昨年から監督となつた。この3年、選手権の二次予選を突破しており、大井高校の名を聞くことが多くなつた。北村前監督のベースに、古市が色を加えているところと言つていいだろう。

古市には、もう一つ別の顔がある。関東社会人リーグ1部の埼玉サッカークラブに所属する現役選手でもあるのだ。エースストライカー、背番号は9だ。

「地元の宮原に少年団がなかつたので、隣の別所の少年団に入つたんです。宮原中に進み、高校は大宮西高校に進みました。当時は大宮東か伊奈学園に進みたかったんですけど、姉も行つてしまつたし、恩師となる塩生昇先生から声をかけてもらつたのですから」

1年のときから試合に出してもらつていたが、チームとしては、県大（県大会）に進んだことが、チームの成績は芳しくなかつた。

大学へ進学した。

「入ったのが94年。セレクションでは、Jクラブから誘われた選手もいる中、自分だけ無名でした。『大宮西だ』と言つても、『あつ、大宮東ね』『稻妻、入つてないね』と言われちゃつて（笑）ケガもあり、なかなかAチームに定着できなかつたものの、二つ上で可愛がつてもらつた内館秀樹（レッグ）がユニバーシアード日本代表となり、さらにレッグに加入するなど、Jへの可能性を感じながら、学生時代を過ごした。

しかし、現実の壁は高く、ある商社に就職することとなる。赴任したのは群馬支店。週末は実家に戻つて、草サッカーを楽しんでいたが、これが、恩師・塩生氏の耳に入つた。

「だったら、教員クラブ（現、埼玉SC）でやれ」

98年、前期

「とはいえ、講師をやりながらの勉強は大変でした。実際に勉強できたのは、春日部高校の定時制に赴任してからです。昼間を勉強の時間に当てました。ここでの経験が大きかつたですね」

サッカー部の顧問を任せられたが、12人しかいない部員、それも「本当にやんちやな奴ばかり」。体当たりとも言える付き合いの中で、徐々に選手も増えていった。そして指導することの喜びを感じ始めた2年目の年、県大会で優勝し、関東大会へ進出した。

「この大会の一日目——決勝が、天皇杯のYKK戦とぶつかつたんですよ。ある生徒から『俺たちはいいから、行つて来いよ』って言われて……30過ぎの人だったんですけどね（笑）。YKK戦では、2点目のFKを決めて、2回戦に進んだんです」

生徒たちの喜びようが、浮かんできそうな話だ。03年、県教委に採用された。

「指導者としては、大学に進学後、また就職後もサッカーを続けてくれる生徒が増えてい

るのをうれしく思っています。やはり選手権に出てたいですね。自分が立てなかつただけにより高い舞台でやらせてあげたいと思つています。

選手としては、来年もやります。練習会場が遠くて辛いこともあるのですが、行けば仲間がいて、やはり楽しいんです。年齢的に上がってもらつたものですから」

「チームとしては、県大（県大会）に進んだことが、チームの成績は芳しくなかつた。

大学は少しでも高いレベルで、と思い、仙台

よ。それも背番号3で、FW（笑）

当然ながら、選手の大半が教師。ピッチ外での話も学校の話題が自然と多く、そんな流れの中「教員になりたい」という気持ちが強くなつていつた。年末を前から説明し、教員試験に向けた準備に入った。

